

車王府本鼓詞『三國誌』の挿入説話について

後 藤 裕 也

はじめに

車王府蔵曲本鼓詞『三國誌』（以下『三國誌』）は、小説『三國志演義』（以下『演義』）をもとに語り物へと改編された作品であり、その筋書きは概ね『演義』を襲っている。この点に関して、筆者はさきに一篇の小論を発表し、この『三國誌』が、『演義』のいかなる版本をもとにして改編されたのかを論じた⁽¹⁾。ここでは挿入されている詩や散文部分の比較などにより、卷九十二を境にして、それ以前が六卷本、それ以後は毛宗崗本によって改編したものであるという結論を得た。しかし、それだけでは『三國誌』の成立過程を十全に明らかにしたとは言いがたいであろう。というのも、作者によって随意に増補、省略された形跡が少なからずあるからである。それらを細かなところまですべて挙げるのは紙幅の都合上不可能であるが、その中から比較的大きな改編が施された箇所を抽出することによって、作品のおおよその全体像を浮かび上がらせることは可能であると思われる。それと同時に、本論では『演義』には見られない挿入説話に焦点を当てることで、それらを手がかりとしてこの作品の制作時期についても考えていきたい。

「斬熊虎」

この『三國誌』では、『演義』の冒頭におかれる「桃園三結義」の前に、卷一、二を「斬熊虎」の説話にあてて語り始める。まずは以下にその梗概を記しておく。

ある夜、関羽は『春秋』をひとしきり読み終えて散歩に出る。そして安平県の牢獄を通りかかったところで鞘に収めている宝剣がカタカタと音を立て鞘から出ようとする。これにより誰かが無実の罪で囚われているのではないかと考えた関羽であったが、その日は当てもなく帰宅する。次の日、関羽は泣きながら牢獄へ食事を持って行く子供韓旺に出会う。韓旺に訳を聞くと、自分の仕えている韓守義が、清明節に妻の花月瓊と墓参りに行ったところ、土地の実力者熊虎が花月瓊を気に入り、無理矢理さらっていったというのである。一方、熊虎は、妻を追いかけて来た韓守義を欺いて招き入れ、一晚家に泊まらせる。夜半、熊虎は手下の熊禄に韓守義を暗殺させようとすが、「夜遊神」によって熊禄は打ち殺される。熊禄が殺されたことを知った熊虎は、王知県に賄賂を贈り、熊禄殺しの罪を韓守義に着せて訴えたため、韓守義は牢に繋がれてしまう。事情を知った関羽であったが、如何せん子供の言うこととて思案に暮れていたところ、そこへ通りかかった事情通の郝大爺にも同様の話を聞き、関羽は韓守義の冤罪を確信した。そこで関羽は、韓旺に家財をまとめてはずれの節義村で待つように指示し、自らは熊虎宅へ向かう。その途上、翌日の早朝に州の役所へ護送するため、韓守義を城門の詰め所に閉じこめておこうという役人の話を偶然耳にした関羽は、隙を見て韓守義を詰め所から助け出す。そして韓守義と共に熊虎の

家へ乗り込み、花月瓊を救出すると先に逃げさせる。残った関羽は熊虎とその家の者を皆殺しにし、故郷を離れ涿州郡へ落ちのびてゆく。⁽²⁾

関羽の出世譚について、正史では「亡命奔涿郡。」とあるのみで、元至治年間刊『三国志平話』になると「因本懸官員貪財好賄，酷害黎民，將懸令殺了，亡命逃遁，前往涿郡。」というように、亡命のおおよその理由も付加される。あるいはこのあたりの記述をもとに「斬熊虎」のようなパターンを持つ故事がしだいに考案されていったのかもしれない。元末明初の編集と考えられる『演義』においても、「因本地豪伯倚勢欺人，關某殺之，逃難江湖五六年矣。」とあるのは、関羽を主人公とするこのような故事がある程度広まっていたことを想像させる。

明末の祁彪佳『遠山堂曲品』には「誅雄虎 北一折」が採録されており、そこには「俠士一言相許，不惜頭顱，此則略見大意。每曲換一韻，非法。」という評語がある。むろんこれだけでは関羽を主人公にした脚本と断定するのは難しい。むしろ関羽劇ならばその名前を記すのではないか。この「俠士」が誰を指すのか明らかではないが、ただ、この劇と同様の筋書きを持つ物語が、『三国志平話』や『演義』に見られる関羽の出世に関する記述と結合して、「斬熊虎」という関羽の出世譚が成立し伝わっていったのではないだろうか。

「斬熊虎」は、現在でも京劇の演目として知られている。⁽³⁾しかし、現在に伝わっている京劇の脚本は、『三國誌』に挿入されているものと若干異なる。京劇では、蒲州太守熊虎の息子熊祥が、張継昌の娘鸞姣を見そめ求婚するも断られる。熊祥は借用証書を偽造し、県令の苗信に賄賂を贈って鸞姣に支払うよう判決を出させる。関羽は事情を知って役所に乗り込み、熊祥と苗信を斬り捨て逃走する。熊虎が追っ手を差し向けると、関羽は聖母廟に隠れ、その泉

で顔を洗うと顔が真っ赤になり、ついに追っ手から逃れることが出来たという筋書きである。両者を較べると共通しているのは熊虎だけで、大まかなプロットや人名に影響は確認できるものの、その関係性は緊密であるとは言いがたい。

一方で、『三國誌』に挿入される「斬熊虎」とほぼ同じプロットを持つものとして、乾隆年間に宮廷演劇のテキストとして周祥钰、鄒金生等によって編纂された『鼎峙春秋』がある。⁽⁴⁾ その第五齣「韓秀才時行祭掃」及び第六齣「関夫子夜看春秋」は、韓守義の妻の名が王鳳仙となっただけであるが、熊虎自身が韓守義の妻をさらう点や、関羽が熊虎を斬って故郷を離れるなど、鼓詞の方が相当に潤色されているとはいえず、筋書きとしてはほぼ同じであり、その関係の深さがうかがわれる。また、『三國誌』巻一第八葉裏には、「列公、此一段書乃是老爺的出則。每每的説演三國不提此事。就是戲上、不過小看春秋一表而已。今朝此書也不可煩絮。但須交代明白、好開演正傳。」という説唱者による台詞が挿入されている。このような演者自身の言葉には当然誇張も含まれていると考えるべきではあるが、当時三國の物語を語るものが多くいたこと、さらに時を同じくして芝居としても上演されてはいたが、それほど詳しくは演じられていなかったということがわかる。実際、『三國誌』のこの導入部分は『鼎峙春秋』をさらに潤色したものとなっていることから、『鼎峙春秋』あるいはそれが基づいた脚本によって、鼓詞の作者が潤色を加えて語られたものと考えられる。この「斬熊虎」のプロットは、後には現在の京劇のように大幅に異なってくるのであるから、ならば鼓詞『三國誌』は乾隆年間からほど遠くない時期に制作されたと仮定しても差し支えないのではないか。

「嚴 剛」

『三國誌』には、『演義』や史実に名の見えない架空の人物が多く登場する。たとえば樓桑村で起兵してより劉備に付き従っている「劉必興・劉必旺」などがよい例で、必要な時にだけまるで便利屋のように使われる。ただ彼らのほとんどは物語の展開に何ら影響を与えない存在である。そのような人物の中で異彩を放っているのが嚴剛という人物である。以下、本節ではこの嚴剛という人物が登場する場面に焦点を当てて見ていくことにしたい。その最初の登場場面は卷十二、弟を殺された公孫瓚が袁紹と決戦する場面（『演義』では第七回にあたる）である。劉関張の三人は南陽の袁術を攻め、公孫瓚は袁紹軍と対峙する。趙雲は救援を求めて張飛を探しに南陽へ向かい、張飛に危急を伝えると先に公孫瓚のもとへ還り、袁紹軍に囲まれた公孫瓚のもとへたどり着く。そこで趙雲は血路を開いて囲みを突破しようと提言すると、傍らから一人の兵士が随行を志願した。それが嚴剛である。はじめて趙雲と嚴剛が顔を合わせた場面は以下のように記されている。

趙爺見這家好漢，暗暗誇稱，連連問道，尊駕貴姓高名何方人氏？那人說，吾乃真定常山嚴子陵之後，嚴剛是也。趙爺聞聽又驚又喜說，我在本處常有人說尊兄大號，總未會見。不想在此處相見。仁兄寶號可是仁義寶彰？那人說，不堪提起，那是旁人過稱。提起尊駕別腦，你可是節義村十一歲舉過石獅子的趙來郎麼？趙爺說，真乃吾鄉親也。

（趙雲はこの好漢を見て内心褒め称え、続けざまに「あなたの名は何と。いったいどちらのご出身で。」と尋ね

ると、その人は「それがしは真定常山の者で嚴子陵の血を引く嚴剛と申す者でございます。」と答えた。趙雲はそれを聞くと驚くやら喜ぶやらで「私もそこにいた時、人々はよくあなたの名前を口にしておりましたが、これまで目通りができませんでした。それが何とこんなところで会えるとは。「仁義宝彰」とはあなたのことでしよう。」と言うと、「その呼び方はおやめ下され、大げさに過ぎます。失礼ながら、もしやあなたは節義村の十歳で獅子の石像を持ち上げたという趙来郎ではござらんか。」と言われたので、趙雲は「まこと私と同郷の人であったか。⁽⁵⁾」

嚴子陵は『後漢書』卷八十三に伝があり、若い頃、後の光武帝とともに勉学に励んだといわれている人物であるが、実際は「會稽餘姚」の人であり、まったく辻褄が合っていない。むろん『三國誌』の作者はそんなことには一切構わず、ひとえに聴衆を驚かせ、物語をより一層興味深いものとするために、随意に嚴子陵と結びつけたのであろう。嚴剛は後漢の嚴剛の後裔と名乗り、趙雲とは同郷で、互いにその噂は聞き知っていた関係であると言うのだが、ではここに登場する嚴剛とはいったい何者であろうか。そこで『演義』の該当箇所、すなわち六卷本『演義』第一卷第十三則「趙子龍盤河大戰」を見てみると以下のような記述がある（毛宗崗本もほぼ同じ）。

瓚初得趙雲未知心腹，令趙雲另引一軍在後。大將嚴綱為先鋒，瓚引中軍立於橋上。從辰擂鼓至巳，紹軍不進。麴義號令弓弩手坐於遮箭牌下，令勿動。嚴綱鼓噪呐喊殺來，義見綱軍到，皆不動。約離數十步，一聲砲響，八百弩手一齊俱發。綱急勒馬回走，被麴義趕上，斬於馬下。

(公孫瓚は趙雲を得たばかりで彼の心中をはかりかね、別に一軍を率いさせて後方に配置した。そして大将の嚴綱を先手とし、自らは中軍を率いて橋の上に立っていた。辰の刻より太鼓を打ちはじめ、巳の刻になっても袁紹軍は攻撃してこない。袁紹軍の將麴義は弩兵を盾の後ろにじっと伏せさせていた。嚴綱が関をつくって攻め出したが、麴義はそれを見ても兵を動かさない。そうして間近まで攻め寄せてきた時に合図を挙げるや、八百の弩兵は一斉に箭を射かけた。嚴綱はあわてて馬首を返し退こうとしたが、麴義に追いつかれて斬り落とされた。)

『演義』における嚴綱の登場場面はわずかにこれだけである。念のため正史を確認しておく、『後漢書』卷七十四袁紹の伝には「紹先令麴義領精兵八百，強弩千張，以為前登。瓚輕其兵少，縱騎騰之，義兵伏楯下，一時同發，瓚軍大敗，斬其所置冀州刺史嚴綱，獲甲首千餘級。」といい、『三國志』卷八の公孫瓚伝には「以嚴綱為冀州，田楷為青州，單經為兗州，置諸郡懸。紹軍廣川，令將麴義先登與瓚戰，生禽綱。」とあるのみである。

『三國志』の作者はこの『演義』に登場する嚴綱に目をつけたのではないだろうか。ともに袁紹と公孫瓚が対峙するという場面であり、趙雲も絡んでいる。もちろん「剛」と「綱」は同音であり、あるいは抄写段階での誤りということも考えられるが、同じ場面で登場し、同じ音の名を持ち、しかもおそらくは『演義』の読者の印象にほとんど残っていない人物という条件を考慮すれば、『三國志』に登場する嚴剛は、この嚴綱をモデルにして創出された者と考えることが出来るであろう。わずかにこれだけしか名前の出てこない一人の武將を明確に記憶している読者は、おそらく当時の中国においてもそう多くはいなかったのではないだろうか。そこに鼓詞の作者は目をつけ、ご丁寧にも嚴子陵の血を引く者という設定まで与えて登場させたというわけである。その後の嚴剛の活躍は、『三國志』序盤にお

ける重要な登場人物の一人といって差し支えない。

このあたり、袁紹・袁術対公孫瓚及び劉関張という構図は確かに『演義』に基づくが、物語の展開はそれより大幅に押し広げられ、まさに作者の独壇場である。例えば以下のような話も挿入されている。趙雲と嚴剛及び公孫瓚は、南陽から戻ってきた劉備と張飛の助けを借り、袁紹軍は一時冀州へ退却する。このとき関羽は袁術を抑えるため南陽に残っていたが、袁術軍の將典章の策によって熊山で囲まれ窮地に陥っていた。その知らせが届くや、張飛は真っ先に飛び出していき、趙雲と嚴剛が先手となり、劉備と公孫瓚も救出に向かった。張飛は一人先を急ぎ、袁術軍の將耿亮を捕らえて関羽のところまで案内させる。耿亮は近道と詐って谷川へ誘い出し、弟の明が乗る舟を呼び三人で乗り込む。耿兄弟は川の半ばで張飛に襲いかかるが敵わず、川に飛び込んで逃げだした。残った張飛は一人で対岸へ渡ろうとするが、何と舟が沈んでいく。あわや沈没というところで川辺の村に住む姚全・姚斌父子が舟を寄せて救出した。姚全は黄巾賊に入っていたこともある息子が川で強盗を働くので、息子と我が身の先を案じ、事前に占いをしてもらっていたのだという。

皆因黃巾賊被滅，回家中常在水中害客人。他父姚全心害怕，怕的是若要犯法連累了舉家滿門。皆因為臥龍崗上芳蘆內，出了位會算命的先生相法奇。姚全去把終身問，先生給他柬一封。告訴他明日在江叉等，仔細要留神。有一員大將遭難無人救，該你父子立奇功。救了他富貴功名全都有，管保你父子作好人。

(黄巾賊が滅びて後は、実家に帰り旅人襲うあくどい渡し。姚全心中穏やかならず、案ずるは法を犯して一族連座。臥龍崗に庵を結ぶ、占い師はすこぶる好評。姚全将来を尋ねれば、書きつけ一枚渡される。書かれた文字は

「明日は流れの分かれ目で、十分注意して待て」と。「一人の大將危地にあり、親子揃って手柄を立てよ。彼を救わば富貴功名手に入らん、息子もきつと善人にならん。」⁽⁶⁾

張飛は姚父子に助けられ、関羽とようやく再会を果たし、南陽に到着した趙雲と嚴剛の活躍もあって関羽は危地を脱し、劉備らは一堂に会することが出来たのである。この「臥龍崗」の「先生」というのは孔明のことであろうが、概ね語り物の作者はこういった伏線を周到に用意し、聴衆の興味を尽きさせない。

さて、話が若干それてしまったが、再び嚴剛を中心に見ていこう。次に嚴剛が現れるのは、劉備が陶謙を助けるために公孫瓚に兵を借りに行く、いわゆる「借趙雲」の場面である。このとき嚴剛は病に伏せており同行できないのであるが、それでも以下のように十分な台詞が与えられている。

劉爺說兵不在多與少，可借與趙嚴二將領雄兵。太守說嚴剛染病未從好，單叫子龍與弟去救徐州城。公孫太守說罷，把趙將軍令來，家丁去不多時，到了趙爺家中，說知劉爺借兵救徐州破曹之事。趙雲正看嚴剛，好漢也出了汗了。就只是氣血未能復元，身體軟些。他聞家丁之言，帶笑對子龍說，倒我看玄德龍行虎步，真乃是超衆的品貌。況他行事令人賓服，都是仁義禮智信，恩待文武疼愛軍民。只怕此人必成大事。剿群奸只怕定是此人矣。比公孫太守天地懸隔，他自破家財，聚民兵三破黃巾，虎牢關勇殺敗呂布。前者救太守拼命廝殺，為義救友。今又探子說破黃巾，又救北海的軍民。今又要救徐州來此借兵。他認得英雄，定叫咱兄弟引兵。他真認人也。嚴剛暗地把英雄論，他睨出玄德是未遇龍。他的眼界能識咱兄弟，賢弟你用心盡力與此人。

（劉備曰く「兵の多寡はさておいて、趙嚴二將を借して下され。」太守言うには「嚴剛病みて未だすぐれず、子竜をつけて徐州城を救わせよう。」公孫瓚はそう言い終わると趙雲を呼びに使いを遣りました。使いの者はまもなく趙家に到着し事の次第を伝えます。趙雲はちょうど嚴剛を看病しておりましたが、汗はすっかり出たものの氣力戻らず体が入らない様子。嚴剛は使いの言葉を聞くと笑みを浮かべて趙雲に「玄德殿の威嚴はまこと群を抜いておる。況や彼の行いには皆敬服し、仁義礼智信を重んじ、文武軍民をいたわれている。きっと大業を成すであろう。奸雄どもを討つのはこの人に違いない。我が公孫瓚殿と比べても天と地ほどの差。彼は自ら家財をなげうち農民兵を集めて三たび黄巾を破り、虎牢関では呂布をも退けた。先頃は友として我が太守を助け、さらには黄巾の残党を破って北海の民を救い、今また徐州を救うために兵を借りに来るとは。彼は英雄を知り、我らを頼ってきたのであろう。眼力もあるとみえる。」嚴剛こっそり英雄論じ、「玄德は時機を得ない竜とみる。かの人には眼力ありて我らを識る、弟よ心を砕いてこの人に尽くせ。」）

この後も趙雲との会話がしばらく続くのであるが、これだけを見ても作者がいかに嚴剛という人物に力を入れていくかわかるであろう。病で同行できないという事情を伝えるだけならば、ここで劉備の功を数え上げさせる必要はないはずである。あたかも趙雲に劉備を推薦しているようですらある。そしてしばらく『演義』に沿って物語は進み、劉備は徐州を離れて曹操とともに献帝に謁見していた。その時に袁紹が公孫瓚を破ったという報告が届くと、舞台は変わって公孫瓚対袁紹の戦いが、卷三十七から卷四十まで嚴剛を中心にして詳しく語られる。序盤は嚴剛の一人舞台で、初戦は呉五兄弟を破り、二戦目は張郃、文醜を敗走させ、三戦目は韓雄を追いつめるが命は助けてやる。この韓

雄という人物は高麗の人とされ、後に嚴剛に降ることになる。続く四戦目は高援を斬り、五戦目に顔良と戦う。顔良は得意の手裏剣を立て続けに投げるが、嚴剛はそれを簡単に跳ね返してしまう。そうして嚴剛の豪傑ぶりを十分に説いたところで、以下のような演者の台詞が挿入される。

列位、顔良乃河北的名將。今日有嚴剛在世、他乃三國中第一豪杰。乃嚴魯之侄。後嚴魯出家、名為皂君長老。

通鑑三國言講、他乃楚霸王大將龍且再轉二十。此有司馬貌夢斷三國、夫子爺乃霸王一轉、曹操乃韓信一轉、董貴妃乃呂后一轉、荀攸荀彧乃張良蕭何一轉、獻帝乃高祖劉邦一轉、劉玄德乃光武一轉、張翼德乃漢姚期一轉。此是按書理表。正非吾所知也。休妄言今古、衆公休笑。書中比論且休講、再把顏良明一明。

(みなさん、顔良は河北の名將ではありませんが、あいにく嚴剛が同じ時世におりました。彼は三國の世に並ぶ者のない豪傑。嚴魯の甥で、後に彼は出家して皂君長老と申しますが、それはさておき、由緒ある三國の書によれば、嚴剛は何と楚の霸王項羽の大將竜且の二十世後の生まれ変わりなのでございます。ここで「司馬貌夢に三國を断ず」のお話を説きますと、関夫子は霸王の生まれ変わりで、曹操は韓信の生まれ変わり。董貴妃は呂後の、荀攸荀彧は張良と蕭何の生まれ変わりでして、さらに獻帝は高祖劉邦の、劉玄德は光武帝の、張飛は姚期の、それぞれ生まれ変わりということでございます。これは書に従って申したまで。私めの知るところではございませんから、どうかお笑いなさらぬよう。書中の列挙はさておいて、話を顔良に戻しましょう。(?)

ここに言う「司馬貌夢断三國」とは、周知の如く『三国志平話』の冒頭を飾る司馬仲相による冥界裁判がもとな

ったものである。後に『古今小説』では「開陰司馬貌断獄」という一篇の小説として独立し、『演義』に採用されることはなかったが、以後も民間では広く伝わっていたようであり、清代に至っても徐石麟に雑劇『大転輪』がある。⁽⁸⁾ただそれぞれが転生する関係を比較してみると、『三國誌』は小説や戯曲に対して相当に異同があり、これもやはり鼓詞の作者がおそらくは自分の記憶を頼りに、或いは随意に並べ立てたのであろう。

その後、嚴剛は顔良をあと一步のところまで追いつめると、袁紹軍は総崩れで退却する。ここで袁紹は策士田豊の計を用い、詐って講和を求め公孫瓚軍を油断させると、その隙をついて公孫瓚の陣に夜襲をかける。公孫瓚は嚴剛の甥嚴用とともに血路を開く。しかし袁紹軍の伏兵に行く手をさえぎられ、嚴用とも離れてしまい危機を迎える。そこへ嚴剛が副将とともに駆けつけ、一人自らしんがりを買って出る。公孫瓚はともかく、まずはこの機会に嚴剛だけは始末しておくべきと、またも田豊が暗闇に乗じて嚴剛を囲み弓矢で攻撃するよう指示を出す。ここまで万夫不当の働きをしてきた嚴剛であったが、袁紹軍の「暗箭」によってついに命を絶たれてしまう。

ここからは嚴剛の甥である嚴用を中心に語り続ける。嚴用はわずかな手勢とともに公孫瓚を護りながら北平へ退却していったが、途中で袁紹軍に追いつかれる。嚴用は孤軍奮闘して血路を開こうとするも、袁紹軍に囲まれて絶体絶命の危機に陥る。ここで以前嚴剛に命を助けられた韓雄が、その恩に報いんと救援に駆けつけ嚴用を救出する。韓雄の陣営で落ち着くと、韓雄は嚴剛のいない今となっては隠退することを伝える。そこへちょうど嚴魯がやってきた。嚴用は叔父の仇を討ってほしいと頼むが、嚴魯は嚴剛が竜且の生まれ変わりで命運の尽きていたことを聞かせる。それを聞いた韓雄は敬服して弟子入りし、ともどもまずは北平へ帰る。嚴魯は、嚴剛の死を悼む趙雲に今後取るべき道を以下のように伝える。

賢徒吾兒多智勇、為何今時不聰明。你乃勇烈英雄士，真美玉與頑石同。吾哨太守公孫瓚，乃是昏暗不明的人。一生他多疑心無決斷，而且量又不寬宏。吾看他氣色又不好，不過五月命必終。倒不如跟師歸六安山內，再遲一年你再投劉使君。若是不聽為師的話，半年床榻之病脫不能。

（弟子は智勇双全のはず、なにゆえ此度は聰明を欠く。おぬしのような英雄が、玉石の区別もつかぬとは。太守の公孫瓚とやら、わしが見るに暗愚の凡人。人を疑い決断鈍く、度量のまったく狭い奴。顔色すぐれぬさま見れば、五月を過ぎずに命運尽きよう。それならば、わしと六安山へ帰りゆき、一年後、劉使君に身を投じよ。師の言葉を聞かぬなら、半年間は病の床から出られぬぞ。）

果たして公孫瓚は嚴魯の予言通り袁紹に滅ぼされ、逃げ延びた嚴用は嚴魯のもとへ、趙雲は劉備のもとへと旅立つのであった。

管見の及ぶ限りではこの嚴剛の物語はこれまで目にしたことはなく、おそらく作者の創作としてよいであろう。すなわち、これは車王府本鼓詞『三國誌』にのみ伝わる物語なのである。『三國誌』は嚴剛の物語によってその独自性を打ち出し、他の三國の語り物との差別化を図り、異彩を放っている。『演義』において前半は関羽、後半は孔明を中心に展開していると言われるが、こと語り物においてはそれさえも一概には言えないのである。

「白猿教刀」

次に挙げる挿入説話は「白猿教刀」、あるいは単に「教刀」とも称される、「斬熊虎」と同様、戯曲にもあるプロット

トである。場面は関羽が長沙を攻めて黄忠と戦うところ、『三國誌』卷七十七から七十九にあたる。まずは黄忠に対して関平が一騎打ちを挑むが劣勢で、加勢に來た周倉ともども善戦するが敗れる。その日は両軍とも一度引き上げ、黄忠が城内に戻ると魏延が降伏するよう勧める。黄忠はそれを断り、翌日関羽と対峙する。互いに持てる劍術の全てを出して刀を交えるが決着はつかず、勝負は次の日に持ち越される。陣に戻った関羽は黄忠を破ることが出来ず、長沙を落とせないのではという不安に襲われ、悶々としながら眠りにつく。やや長くなるが、以下に白猿の登場する箇所を示しておく。

話說白猿催雲正走，忽見一服豪光擋住雲頭。他心中納悶，伸手拂開雲霧，往下閃目觀看，這豪光却打一座寨內中軍所起。又見行椅之上有一人扶桌而臥，又見三軍人人睡定，也有鳴更未睡之人，往來巡邏，梆鈴聲響。猿仙看罷，他巡聞一算早知其意。暗說，原來關將領兵來取長沙逢了敵手，因老將黃忠，他心中憂悶，怕取不了長沙令人恥笑。此人仁義禮智信兼全，必定位列天班成其正神。況吾二人夙世有緣，何不助他一勝之力。授他一路神刀令他成功，以正此人英武之氣，成全他素日之名。一定是這個主意好。猿仙想罷，收了雲光，落於木寨之中，用仙腕一指夫子的牙營，竟將聖賢的神魂點出殼來。老爺在夢中一看，只見對面有一人站立，竟不是世上的形相，却是道家的打扮。頭戴一頂金道冠，身穿白素雲衣，腰束虎皮，仙裙上勒黃絨綠縞，背上七星寶劍，還有丹藥葫蘆，足登一雙雲履，生得不滿三尺是毛，眼金睛尖嘴縮腮，面上帶着一團和氣。

那猿仙帶笑把將軍叫，你休得害怕免擔驚。吾非精來吾非怪，法號猿仙人所聞。前七國中天下曉，蟠桃會上把仙部登。素與尊駕緣分重，今晚前來會將軍。你取長沙會敵手，黃忠也是美英雄。刀法武藝一般樣，難把高低上下分。

吾今傳授你一路刀法，取長沙只在反掌中。需要行仁要行義，智勇雙全才算英雄。斷不可傷害老將命，收給令兄正江洪。說罷猿仙不怠慢，架上忙將雙手伸。取下三停刀一口，青龍刀竟不覺沉。分開門路劈又砍，步法隨身可愛人。刀使一百單八路，前後左右滿渾身。龍飛鳳舞一般樣，來往閃電一樣同。真乃純熟人難比，果然奧妙令人驚。仙家萬件全都會，靈仙誰不讚揚稱。聖賢夢中心大喜，刀法精練有奇能。雖然巧妙可與某一樣，黃忠刀法也相同。忽見天仙回身轉，這一刀纔驚了一位關聖人。

夢中看見猿仙刀法雖精與自己的一般，也是雄王的門路，不足為奇。唯有末後一刀轉身皆砍。只一刀名為背後控刀計。纔把一位夫子爺從夢中驚醒。

(さて白猿は雲をせかして飛んでいると、にわかになんかの光にさえぎられました。彼は頭に来て雲霧をかき分け下をのぞくと、その光は軍営から昇っております。見やれば一人の男が机に伏して眠り、三軍の兵士たちも眠っています。また寝ずの番が見回り、拍子木や鈴を鳴らしています。猿仙見終えるやその状況を知り、「なるほど、関將軍が長沙を攻め取りに出陣したが、老将黃忠のために長沙を落とせず人に笑われるのを恐れて悶々としているのか。この者は仁義礼智に信まで備え、天界の正神にならぶ人。いわんやわしとは宿世より縁あるゆえ、一つ手助けしてやろう。彼に必殺の劍術を授けて勝たせ、その武勇を發揮させれば、彼も名を遂げることができるというもの。うむ、それがよい。」猿仙はそう考えると雲をしまい寨へ降り、関羽の本営へ手を伸ばすと、その魂を肉体からつまみ出しました。関羽は夢で向かいに誰かが立っているのを目にします。姿形はこの世の人とは思われず、道家の装いをしており、頭には金の冠を載せ、雲のような白衣をまとい、腰には虎の皮を巻き、スカートには萌葱の絹ひもを結び、七星宝劍と丹藥入りの瓢箪を背負い、靴は步雲履、背は三尺に満たず毛だらけで、

金色のまなことがった口にこけたほお、おもてには穏やかな表情を浮かべています。

猿仙は笑みを浮かべつつ「將軍、驚くことはありません。何かの精でも物の怪でもなく、法号は猿仙という者です。前七国には天下に聞こえ、蟠桃会にも参加しました。もとよりそなたと縁深く、今宵会いに来たのです。

長沙を取らんと敵に遭い、黄忠まこと一人の英雄。劍術武芸も同じくすぐれ、勝敗なかなか決まらぬ様子。わしが劍術授ければ、長沙を落とすも朝飯前。何があっても仁義を重んじ、智勇を兼ねてこそ英雄。断じて老将の命は取らず、令兄に勧めて乱を治めよ。」言い終わるや猿仙は、壁に向かって両手を伸ばす。手に持ちたる一ふりは、軽く扱う青竜刀。型を演じて振り回し、敬服すべき足さばき。一百八つの型を出し、前後左右と体を動かす。竜が飛翔し鳳凰舞い、稲光のきらめくよう。まことの達人比類無く、深奥なること驚嘆すべき。猿仙通じざる型は無く、賛嘆せざる者は無し。関公夢に大いに喜び、稀に見るその精通ぶり。されど某とまったく同じ、黄忠の劍とも相い似たり。最後に猿仙身を廻らし、関公大いに驚くこの一太刀。

夢に見た猿仙の劍術は、精通しているとはいえ自分と同じ雄王の型なれば奇とするに足らず。ただ最後の振り向きざまの一太刀は背後控刀計といって、関公は夢から驚き目覚めたのでした。）

白猿が劍術にすぐれるというのは唐代の伝奇『白猿伝』にすでに見られ、『鏡花縁』や『三遂平妖伝』などにも悟りを開いた白猿が描かれている。中国において白猿を扱った物語は数多くあるが、ここに現れる白猿は、金の冠に虎の皮を巻き、歩雲履を履いているというその出で立ちを見ただけで、容易に『西遊記』の孫悟空を想起させる。しかも雲に乗って現れ、蟠桃会に参加していたり、さらにこのすぐ前の唱詞には「祖居原在鷹愁澗」という句もあって、

鼓詞の作者が孫悟空をイメージしてこの白猿の姿を描写したのは間違いないと思われる。⁽⁹⁾

ただ気にかかるのは、散文部分にある「吾二人夙世有縁」と唱詞の「素與尊駕縁分重」の句である。鼓詞の作者はいったい何に基づいてこのように言うのであろうか。目下のところ具体的な例は提出し得ないのであるが、あるいは孫悟空が仙術を会得して東海竜王から如意金箍棒をせしめたことや、関羽が竜神の下凡したものであるという説話が広く伝わっていたことなどにそのヒントを得たのかも知れない。⁽¹⁰⁾

この関羽が黄忠と対戦して勝利を得られず、その日の夢に白猿が現れて剣術を教えるというプロットとしては、同じく車王府曲本に収められる高腔の脚本「教刀 全串貫」がある。車王府に収蔵される戯曲の脚本には「全串貫」と「総講」の二種類があり、⁽¹¹⁾「全串貫」は各役の白と唱および科も備え、役者が最終段階で用いる脚本である。そして「教刀」の脚本には、「内起 二更三更介。白猿上耍刀介。浄醒介。教刀完猿下。」（浄は関羽）というト書きが見られる。記述は甚だ簡略であるが、『三國誌』と全く同様のプロットは現在のところほかに確認できず、やはり鼓詞との関係性を認めざるを得ないであろう。

高腔はいわゆる花部の一として、江西より起こった弋陽腔やそれが北京に入った京腔と同一系統の曲調であるが、これらの最も流行した時期は乾隆頃までで、嘉慶道光以降はしだいに梆子腔に取って代われ衰退していったといわれている。⁽¹²⁾ むろんこの一事をもって、『三國誌』が乾隆年間に制作されたと断ずるのは早計であるが、「斬熊虎」の節でも述べたように、やはり清中葉頃の作とは考えられるであろうし、またその傍証にはなり得よう。

さらに現在の京劇について付言するならば、まず『京劇劇目初探』に「白猿教刀」が採録されているが、⁽¹³⁾そこでは「關羽臨陣不勝敵將，白猿夢中教以刀法，遂斬敵將。」という提要を示すのみで、いつ誰と戦ったときに白猿が剣術

を授けたのかを知ることが出来ない。『京劇劇目辞典』には「關羽與敵將交戰、二人刀法不相上下、勝敗不分。關羽夜夢白猿教刀、武藝大為長進。」という、先と同じような説明をしたあとで、さらに「據李洪春談、此乃關羽斬熊虎後克范陽時事。又《關帝事蹟徵信編》雜綴所引《周魯類書纂要》：關公與曹操之臣蔡陽交兵、公夜夢一人教拖刀之法。次日交戰、公用拖刀計以斬蔡陽。」とある。『關帝事蹟徵信編』は乾隆三十九年の刊行であるから、そのころにはすでに、ある者が關羽の夢に現れて劍術を教えるというプロットは存在しており、おそらくそれを對黃忠という場面で用いたものがこの『三國誌』及び高腔の「教刀」で、後にそれが改編され、京劇「走范陽」に組み込まれたのである。⁽¹⁴⁾

おわりに

ここまで『三國誌』の挿入説話に焦点を当てて見てきたが、確かに鼓詞『三國誌』は基本的には小説『三国志演義』をもとに改編されたものではあるが、そこに挿入されている説話の来源を考証していくと、当時の戯曲とも非常に深い関係を持っていることがわかる。冒頭に配された「斬熊虎」の説話は、乾隆期に編まれた『鼎峙春秋』のそれと近似しており、『三國誌』の「白猿教刀」説話は、乾隆頃に流行した高腔の「教刀」と同じ筋書きである。そして、まだ毛宗崗本『三国志演義』がその他の版本を淘汰する以前、英雄志伝本も同時に読まれていた時期のものであるということを考え合わせると、この車王府本鼓詞『三國誌』の成立時期は乾隆年間から大きくは下らず、少なくとも清代中葉にはすでに完成していたと推定して差し支えなからう。

最後に付言しておく、『三國誌』に挿入された説話はむろんこれだけではない。今ここにその概略だけを挙げる

と、例えば巻五では劉備と甘夫人のなれそめが語られる。巻八十六・八十七には龐統が劉備のもとで未陽県に着任したときに事件を解決する説話が挿入されている。その事件とは、包公ものでよく知られる「双勘釘」説話を借りたもので、異なるのは登場人物の名前と、釘一本が針三本に、突き刺すのが脳天から鼻孔になったぐらいのものである（ちなみに『百家公案』では鼻孔に刺す）。また、張松が劉備に蜀を献ずる巻九十一では、やはり龐統が自らその弟を騙って探りを入れたり、巻一百零五には諸葛亮が曹操に対する悪口雑言を書いた板を陣前に押し出して曹操を怒らせるという場面もある。こうして『演義』には見られない挿入説話を列挙してみると、足繁く通う聴衆たちがどれほど三国の物語を楽しみにしていたか、それと同時に語り物の作者がいかに工夫を凝らしていたかが実によく伝わってくるのである。

注

(1) 詳しくは拙論「車王府本鼓詞『三國誌』の成立過程について——『三國志演義』との関係を中心に——」（関西大学中国文学会紀要第二十七号）二〇〇六を参照されたい。また『演義』の引用については、これにより六巻本と毛宗崗本を併用する。

(2) 大塚秀高氏は「関羽の物語について」（埼玉大学紀要第三十巻一九九四）において、まず康熙中葉になった清盧湛撰『関聖帝君聖蹟図誌全集』の「憫冤除豪」（呂熊が韓守義の妻をさらう）を挙げ、また清初になったとされる京腔劇本『清音小集』（雄虎員外が韓守義の妻をさらう）、その他搜輯整理された民間に伝わる同じパターンを持つ説話などを列挙し、「義侠殺人物語の変遷」として一項を立てている。また関羽の出世については、洪淑苓『関公民間造形之研究——以関公伝説為重心的考察——』（国立台湾大学出版委員会一九九五）に詳しい考察がある。洪氏はその第三章「関公之生平伝説」において、『関公的伝説』（張志徳等著 山西人民出版社一九八六筆者未見）所収の「怒斬雄護員外」等を引用し、この物語が、いわゆる英雄が台頭する前の初期に遭遇するべき試練であるとしている。

- (3) 『関羽戯集 李洪春演出本』(李洪春等整理 上海文芸出版社 一九六二)に収める「斬熊虎」による。この劇は王鴻寿(一八五〇—一九二五)の作とされており、同治光緒間頃の作と考えられる。『京劇劇目初探増訂本』(中国戲劇出版社 一九八〇)、『京劇劇目辞典』(中国戲劇出版社 一九八九)にも著録。
- (4) 『古本戯曲叢刊』九集(中華書局 一九六四)所収。なお、宮廷大戯については、周貽白『中国戲劇史』(中華書局 一九五三)や岩城秀夫著『中国古典劇の研究』(創文社 一九八六)などを参照。
- (5) 原文の引用は全て繁体字に統一し、明らかな誤りはこれをあらためた。なお、訳文は拙訳による。
- (6) 卷十三第十三—十四葉。なお、姚斌なる人物は京劇「収姚斌」(一名「真假関公」)において、母の病を治すために赤兎馬を盗もうとする孝行息子としてその名が見える。
- (7) 卷四十の唱詞では「嚴魯」の名が、おそらく押韻のためと思われるが、「嚴魯方」となる箇所がある。すぐ後の散文部分でも二箇所、計三箇所がそうなっているが、ここでは「嚴魯」に統一しておく。
- (8) 『清人雜劇二集』(鄭振鐸 一九三四)所収。莊一拂『古典戯曲存目彙考』著録。
- (9) 『西遊記』(第十五回)では、菩薩が三蔵の旅を助けるために遣わした西海竜王敖閏の子が潜んでいるのが「鷹愁澗」である。鼓詞のこの唱詞では、猿仙が代々「鷹愁澗」に住んでいるとしか読めないが、やはり猿仙と悟空、『西遊記』という連想から使われた語句と思われる。
- (10) 大塚氏前掲論文および洪氏前掲書に、関羽と竜神の関係についての考察がある。
- (11) 車王府曲本全体の構成や、「全串貫」「総講」などの語については、田仲一成「再び車王府曲本について」(『学鏡』一九九一)を参照。
- (12) 高腔の流行とその衰退については、青木正兒『支那近世戯曲史』(弘文堂 一九三〇)及び北京市芸術研究所・上海芸術研究所編著『中国京劇史』(中国戲劇出版社 一九九〇)を参照。
- (13) 凡例によると、伝承が途絶えたものや流行していない曲目にはその採録源を掲げるとしており、「白猿教刀」は『上海市劇目』(筆者未見)によるという注記がある。
- (14) 「走范陽」の脚本は未見であるが、李洪春述・劉松岩整理『京劇長談』(中国戲劇出版社 一九八二)には『走范陽』は緊接『斬熊虎』的一齣關公戯。演的是關公斬了熊虎逃走途中、在麻姑廟夢見麻姑命白猿教他刀法、又賜他三卷大書《春

秋左轉》、《兵書戰策》和《春秋刀法》、讓**他報效漢室到鼎足三分。他醒後攜書直奔范陽。**」とあり、彼の師王鴻寿の創作になるという。注(3)にも挙げたとおり、『三國誌』中の「斬熊虎」及び「白猿教刀」の故事は、これらが京劇に吸収される前段階のものと考えられるので、『三國誌』の制作時期はやはり清中葉までさかのぼるであろう。